佐農技防第 101-7 号
令和 8 年（2026 年）10 月 28 日

病害虫発生予察情報予報第 7 号（11 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

Ⅰ．予報の概要および各作物の特記事項

<table>
<tr><th>作 物 名</th><th>病 害 虫 名[注1)]</th><th>11 月の予想発生量[注2)]
平年比</th><th>予報対象の病害虫
（抜粋）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">コムギ</td><td>シロトビムシ類</td><td>やや少</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">１．シロトビムシ類
常発圃場では、クルーザーFS30 の塗抹処理、またはアドマイヤー水和剤の種子乾粉衣とキヒゲン R-2 フロアブルの塗抹処理を併せて行うことにより防除を行う。</td></tr>
<tr><td>麦類全般</td><td colspan="3">１．種子伝染性病害（オオムギ網斑病、麦類裸黒穂病等）
健全種子を使用するとともに、種子消毒を徹底する。特に、網斑病は汚染種子と被害残渣が重要な伝染源となるため、昨年発生した圃場では確実に種子消毒を行う。</td></tr>
<tr><td>大豆</td><td colspan="3">１．紫斑病
適期収穫を行い、乾燥施設へ速やかに搬入する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">野菜共通</td><td>チョウ目害虫
（ハスモンヨトウ、
オオタバコガ、
シロイチモジヨトウ）</td><td>多</td><td>
シロイチモジヨトウ</td></tr>
<tr><td colspan="3">フェロモントラップでの誘殺数は平年比やや多～多で推移しており、今後も発生が増加するおそれがある。各圃場での発生状況を確認し、若齢期に防除する。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">タマネギ</td><td>べと病</td><td>やや多</td><td rowspan="3">
ネギアザミウマ</td></tr>
<tr><td>ボトリチス葉枯症</td><td>並</td></tr>
<tr><td>ネギアザミウマ</td><td>多</td></tr>
<tr><td colspan="3">１．べと病
暗渠・明渠や高畝による排水対策を行うとともに丁寧に耕起し、べと病が発生しにくい環境づくりを行う。本圃での発生を抑えるために、育苗期および定植前後の薬剤防除を確実に実施する。

２．シロイチモジヨトウ
苗床での食害が例年より多い。フェロモントラップでの誘殺数も平年を上回っており、今後も発生が多い状況が続くおそれがあるため、圃場をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。

３．乾腐病
前年に発生した圃場など、発生のおそれがある本圃に植え付ける場合、地床育苗の苗は定植直前にベンレート水和剤またはトリフミン水和剤を根部浸漬し、セル育苗の苗は定植前日に同薬剤をトレイに灌注する。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>作 物 名</th><th>病 害 虫 名[注1)]</th><th>11月の予想発生量[注2)]
平年比</th><th>予報対象の病害虫
（抜粋）</th></tr>
<tr><td rowspan="4">イチゴ
（本圃）</td><td>うどんこ病</td><td>並</td><td rowspan="3">
ハダニ類</td></tr>
<tr><td>ハダニ類</td><td>多</td></tr>
<tr><td>アブラムシ類</td><td>やや多</td></tr>
<tr><td colspan="3">１．ハダニ類
多くの圃場で発生が確認されている。多発すると防除が困難になるため、発生初期に防除を徹底する。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">キュウリ</td><td>べと病</td><td>多</td><td rowspan="5">
黄化えそ病</td></tr>
<tr><td>うどんこ病</td><td>並</td></tr>
<tr><td>褐斑病</td><td>多</td></tr>
<tr><td>アザミウマ類</td><td>多</td></tr>
<tr><td>コナジラミ類</td><td>多</td></tr>
<tr><td colspan="3">１．ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病
アザミウマ類、コナジラミ類ともに発生が多い。ウイルス病罹病株を認めた場合は、早急に除去し、適切に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。また、次作での発生を防ぐため、晩秋から春先の植替え時は、キルパーを用いて１週間程度密閉し、株を完全に枯死させた後、圃場内に植物がない状態にして２週間以上空けてから定植する。施設内の雑草も発生源となるため、除草も徹底する。

２．褐斑病
発病が多くなってからでは防除が困難となるので、発生初期から予防散布を徹底するとともに、下葉の老化葉や被害葉は伝染源となるので、圃場外に持ち出して処分するなど圃場衛生に努める。発病が多かった圃場では、使用した資材等に胞子が付着して次作の伝染源となるため、ハウス内と資材の消毒を行う。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">トマト</td><td>コナジラミ類</td><td>並</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">１．コナジラミ類：黄化葉巻病、黄化病
今後のコナジラミ類の多発とウイルス病の発生を防止するため、侵入防止対策と初期からの防除を徹底する。ウイルス病罹病株を認めた場合は、早期に除去し、適切に処分する。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">キャベツ</td><td>菌核病</td><td>やや多</td><td rowspan="3">
キャベツ菌核病</td></tr>
<tr><td>黒腐病</td><td>やや多</td></tr>
<tr><td>アブラムシ類</td><td>多</td></tr>
<tr><td colspan="3">１．菌核病
結球初期から予防散布を実施する。</td></tr>
</table>

作 物 名	病 害 虫 名[注1)]	11月の予想発生量[注2)] 平年比	予報対象の病害虫 （抜粋）
キク	白さび病	やや多	 チョウ目害虫によるキクの被害
	アザミウマ類	やや多	
	アブラムシ類	やや少	
	ハダニ類	並	
	ハモグリバエ類	並	
	チョウ目害虫	やや多	
	１．チョウ目害虫 フェロモントラップでの誘殺数が多く推移している。幼虫の齢が進むと薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。		

注１）病害虫名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注２）予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病害虫について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注３）防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」も参照してください。
病害虫総合防除計画掲載アドレス
https://www.pref.saga.lg.jp/kiji003101844/index.html

総合防除計画

Ⅱ．予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

〇平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

〇農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
〇発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

〇各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（３ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

〇１～３ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

11 月の気象条件

〇病害虫の発生に関与する 11 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 8 年 10 月 22 日）を基に、**「気温：平年より高い」**、**「降水量：平年より多い」**と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における 11 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並（佐賀市の平年値）	高い(多い)	
気温	10	20（13.3℃）	70	**高い**
降水量	20	30（89.4 ㎜）	50	**多い**

Ⅲ．11 月の予報

コムギ

【概要に戻る】

１．シロトビムシ類

１）予報の内容

発生量：**平年よりやや少ない**

２）予報の根拠

(1)令和 8 年産コムギでの発生状況（図 1 参照）

発生圃場率：0%（平年 2.0%、令和 8 年産 0%）

平年比：やや少〈－～±〉

３）防除上注意すべき事項

(1)播種時期が遅くならないよう、適期播種に努める。

(2)被害が多い圃場では、芽出し播きや芽出し乾燥播きを行う。

(3)被害が著しい圃場では、オオムギを作付けする。

(4)常発圃場では、クルーザーFS30の塗抹処理、またはアドマイヤー水和剤の種子乾粉衣とキヒゲンR-2フロアブルの塗抹処理を併せて行うことにより防除を行う。

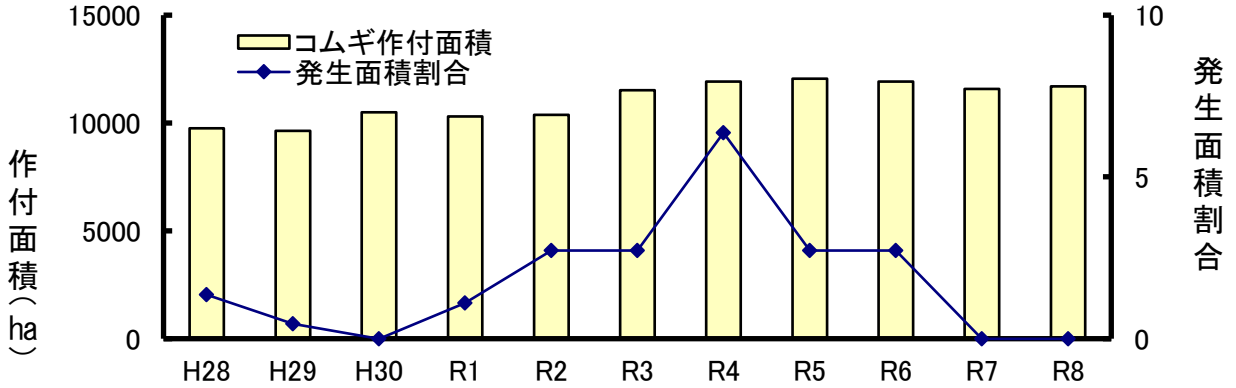


図1　コムギにおけるシロトビムシ類の発生面積割合の推移

野菜共通

【概要に戻る】

１．チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

１）予報の内容

発生量：**平年より多い**

２）予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査（図 1～3 参照）

作物名	食害株率(%)	平年比	平年値(%)	前年値(%)
タマネギ	4.0	多〈＋〉	0.2	0.5
イチゴ	3.2	やや少〈－～±〉	11.6	7.0
キャベツ	26.3	少〈－〉	44.4	36.3

②フェロモントラップによる 10 月の誘殺数（図 4～6 参照）

ハスモンヨトウは、平年比：やや少〈－～±〉（図 4）

オオタバコガは、平年比：多〈＋〉（図 5）

シロイチモジヨトウは、平年比：多〈＋〉（図 6）

３）防除上注意すべき事項

(1)早期発見に努め、卵塊や分散前のふ化幼虫（ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ）は見つけ次第除去し、適切に処分する。

(2)幼虫の齢が進むと薬剤の効果が低下するため、若齢期に防除を行う。

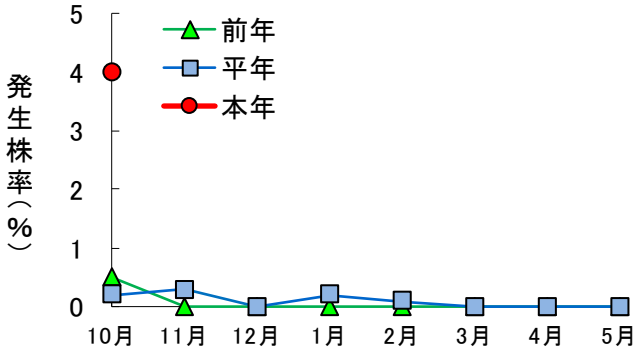


図1 チョウ目害虫によるタマネギの被害株率の推移

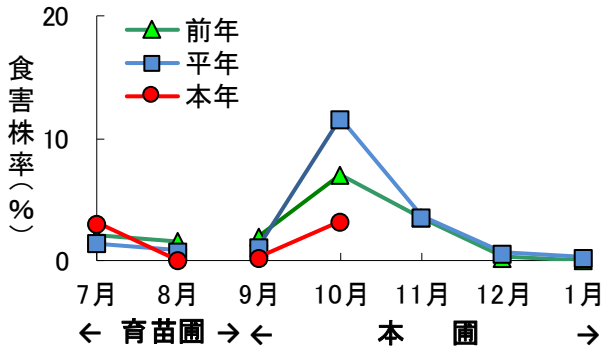


図2 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

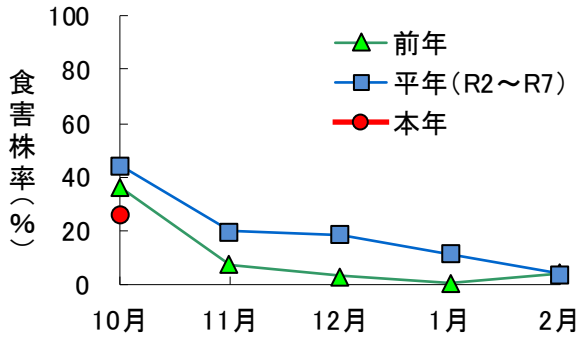


図3 ﾁｮｳ目害虫によるｷｬﾍﾞﾂの被害株率の推移

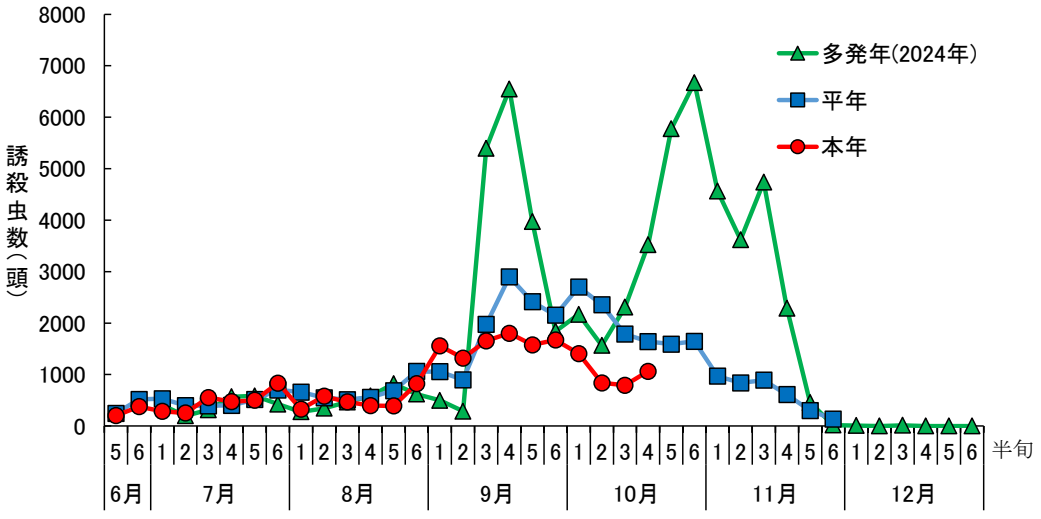
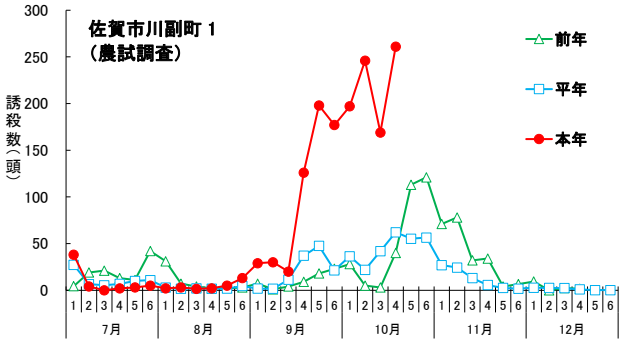
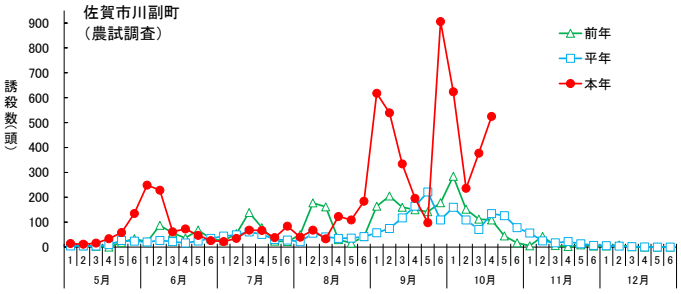
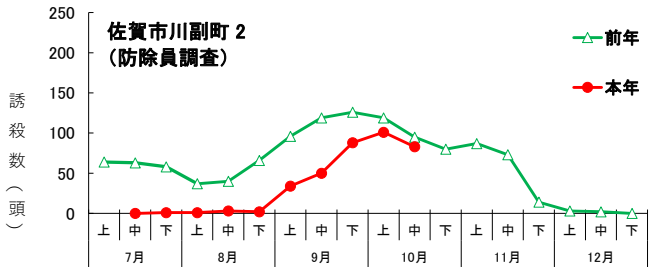


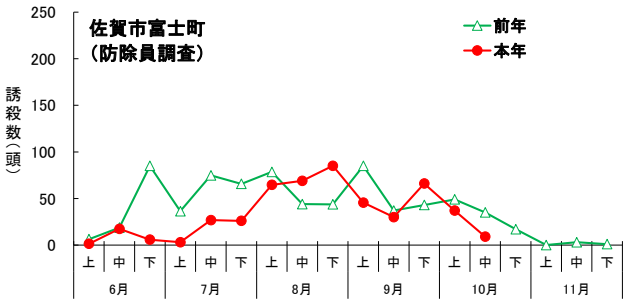
図４ フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の誘殺数
（農業試験研究センター内設置の２トラップの平均値）



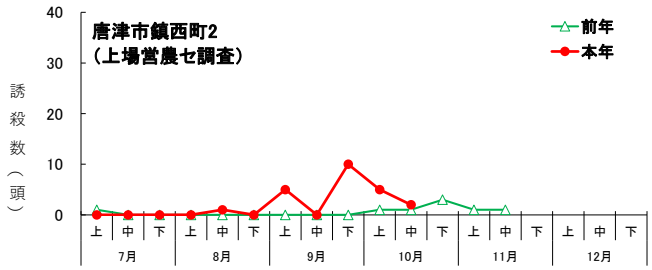




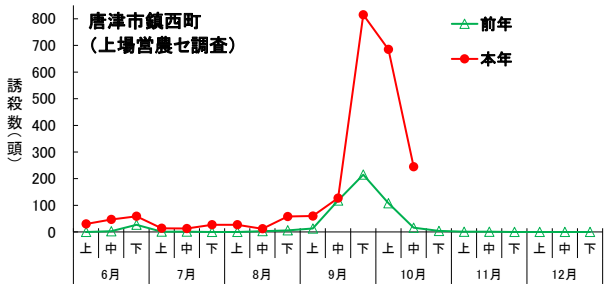
※2021年から調査を開始したため、平年値はない。



※2023年から調査を開始したため、平年値はない。



※2024年から調査を開始したため、平年値はない。



※2024年から調査を開始したため、平年値はない。

図５ フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数　図６ フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半誘殺数

タマネギ

【概要に戻る】

定期調査 14 育苗圃場
調査日：10月19日～20日

１．べと病

１）予報の内容
発生量：**平年よりやや多い**
（11月に発病することはまれだが、苗床あるいは本圃で感染するリスクがある。）

２）予報の根拠
(1) 発生の現況（苗床）
発生株率：0%（平年0%、前年0%）
平年比：並〈±〉
(2) 圃場の菌密度（本圃）
平成25年以降、発生株率・発生圃場率はともに高い傾向が続いており、本圃の菌密度は高いと推察される。〈±～＋〉（図２参照）

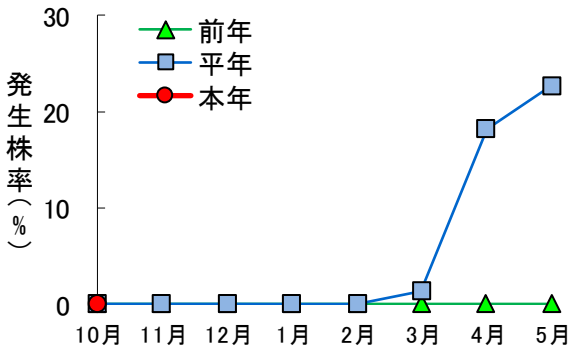


図１ 中晩生タマネギでのべと病の発生推移

３）防除上注意すべき事項

(1)暗渠・明渠や高畝による排水対策を行うとともに丁寧に耕起し、べと病が発生しにくい環境づくりを行う。

(2)本圃での発生を抑えるために、育苗期および定植前後の薬剤防除を確実に実施する。

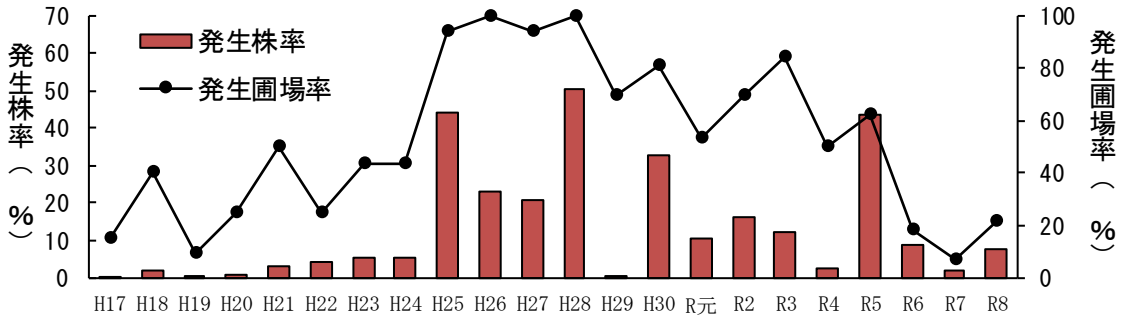


図２ タマネギ本圃でのべと病の発生圃場率と発生株率の年次推移 （４月下旬の定期調査結果）

２．ボトリチス葉枯症

１）予報の内容

発生量：**平年並**

２）予報の根拠

(1)発生の現況（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並〈±〉

(2)11月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件〈＋〉

３）防除上注意すべき事項

(1)育苗期から予防防除を行う。

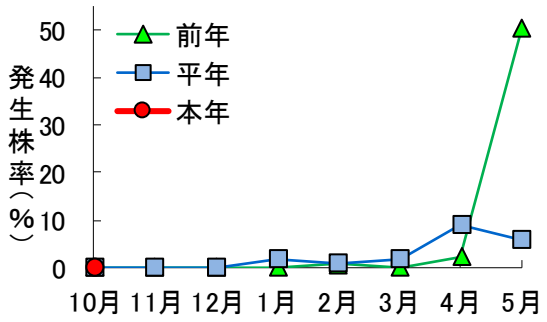


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

３．ネギアザミウマ

１）予報の内容

発生量：**平年より多い**

２）予報の根拠

(1)発生の現況（図1参照）

発生株率：2.5%（平年0.1%、前年0%）

平年比：多〈＋〉

(2)11月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件〈＋〉

３）防除上注意すべき事項

(1)本圃へ持ち込まないよう、苗床での防除を徹底す

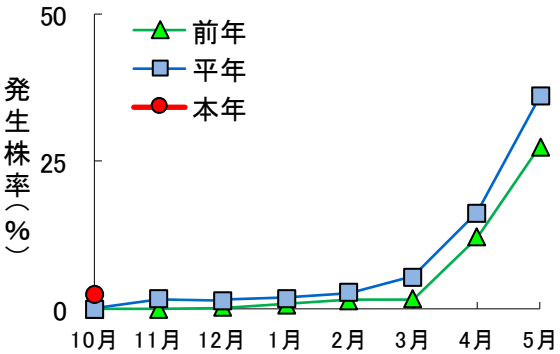


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移

イチゴ（本圃）

【概要に戻る】

定期調査 10 圃場、防除員 6 圃場
調査日：10 月 19～22 日

１．ハダニ類

１）予報の内容
発生量：**平年より多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図 1 参照）
発生株率:15.0%(平年 6.7%、前年 3.8%)
平年比：やや多〈±～＋〉

(2)11月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈＋〉

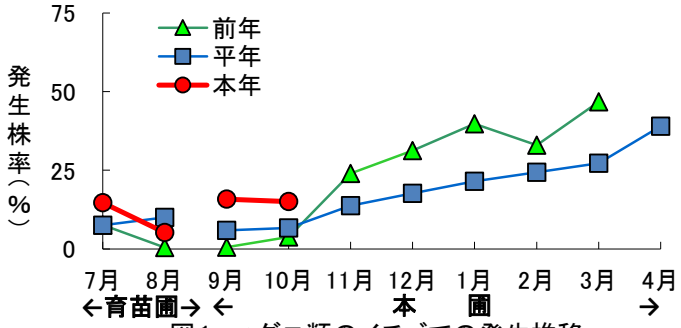


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。
(2)天敵を利用する圃場では、天敵への影響が少ない薬剤を用いてハダニの密度を 0 頭レベルに抑えた後に、天敵（カブリダニ類）を放飼する。

２．アブラムシ類

１）予報の内容
発生量：**平年よりやや多い**

２）予報の根拠
(1) 発生の現況
①定期調査（図 1 参照）
発生株率：1.5%（平年 3.9%、前年 0.3%）
平年比：やや少〈－～±〉

(2)11月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈＋〉

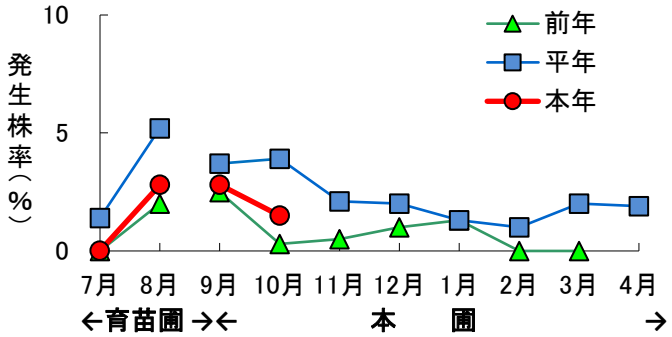


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

キュウリ

【概要に戻る】

定期調査5圃場
調査日：10月19日～22日

１．べと病

１）予報の内容
発生量：**平年より多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図1参照）

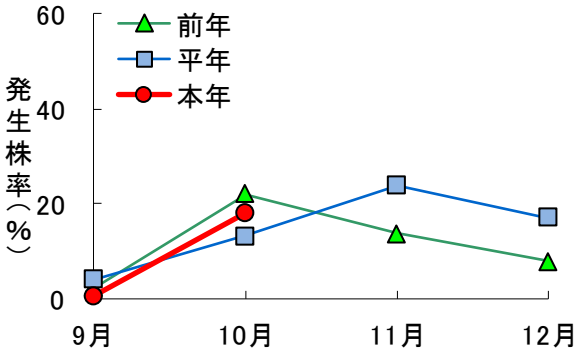


図1 キュウリべと病の発生推移

発生株率：18.0%（平年13.3%、前年21.9%）
平年比：やや多〈±～＋〉
(2)11月の気象予報
降水量は多く、多発生の条件〈＋〉

3）防除上注意すべき事項
(1)湿度が極端に高くならないよう、適正な湿度管理に努める。

2．褐斑病

1）予報の内容
発生量：**平年より多い**

2）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図1参照）
発生株率：24.0%（平年10.3%、前年51.3
平年比：やや多〈±～＋〉
(2)11月の気象予報
降水量は多く、多発生の条件〈＋〉

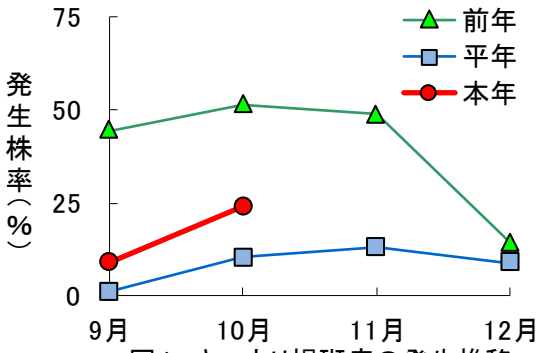


図1　キュウリ褐斑病の発生推移

3）防除上注意すべき事項
(1)発病が多くなってからでは防除が困難となるので、発生初期から予防散布を徹底する。
(2)湿度が極端に高くならないよう、適正な湿度管理に努める。
(3)下葉の老化葉や被害葉は伝染源となるので、除去するなど圃場衛生に努める。

3．アザミウマ類

1）予報の内容
発生量：**平年より多い**

2）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図1参照）
発生株率：20.0%（平年8.0%、前年25.0
平年比：多〈＋〉

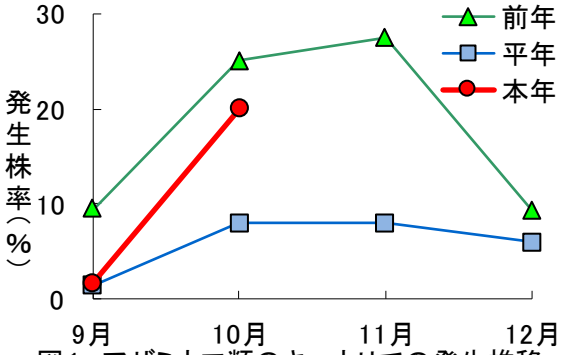


図1　アザミウマ類のキュウリでの発生推移

3）防除上注意すべき事項
(1) 黄化えそ病の症状（新葉の黄化・葉脈透過、葉のモザイク・えそ斑点等）が見られる株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。
(2)黄化えそ病が未発生の圃場においても、アザミウマ類の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。

4．コナジラミ類

1）予報の内容
発生量：**平年より多い**

2）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図1参照）
発生株率：51.0%（平年25.5%、前年51.
平年比：多〈＋〉

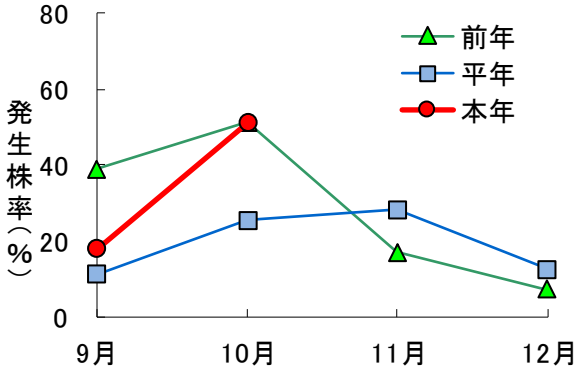


図1　コナジラミ類のキュウリでの発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)退緑黄化病の症状（葉脈間退緑、葉のモザイク等）が見られる株は速やかに抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。
(2)退緑黄化病が未発生の圃場においても、コナジラミ類の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。

トマト

【概要に戻る】

定期調査：5圃場、防除員4圃場
調査日：10月19～22日

１．コナジラミ類

１）予報の内容
発生量：**平年並**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図1参照）
発生株率：10.0%（平年10.7%、前年24.4%）
平年比：並〈±〉

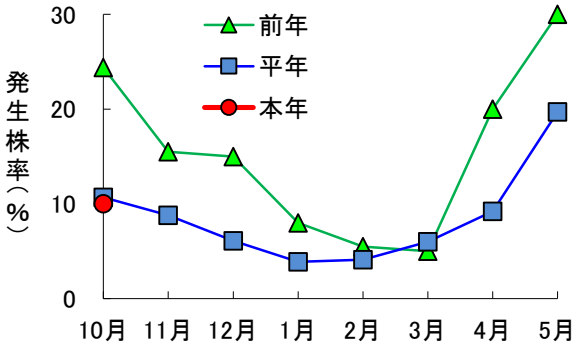


図1　コナジラミ類のトマトでの発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)ウイルス病（黄化葉巻病、黄化病）の発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
(2)施設内の侵入を防ぐため、開口部に0.4㎜目合い以下の防虫ネットを設置する。
(3)多発すると防除が困難となるため、黄色粘着板を設置するなどして早期発見に努め、発生初期から防除を実施する。

キャベツ

【概要に戻る】

定期調査8圃場
調査日：10月19日～22日

１．菌核病

１）予報の内容
発生量：**平年よりやや多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図1参照）
発生株率：0%（平年0%、前年0%）
平年比：並〈±〉
(2)11月の気象予報
降水量は多く、多発生の条件〈＋〉

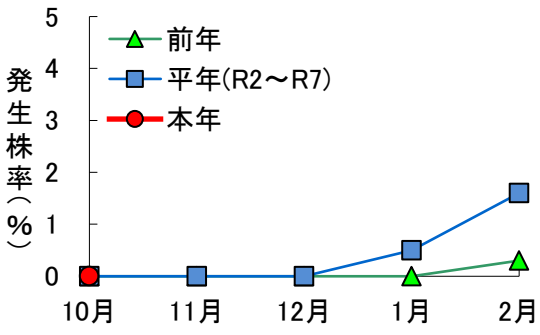


図1　キャベツ菌核病の発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)結球初期から予防散布を実施する。

２．黒腐病

１）予報の内容
　発生量：**平年よりやや多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
　①定期調査（図1参照）
　　発生株率：0%（平年0%、前年0%）
　　平年比：並〈±〉
(2)11月の気象予報
　降水量は多く、多発生の条件〈＋〉

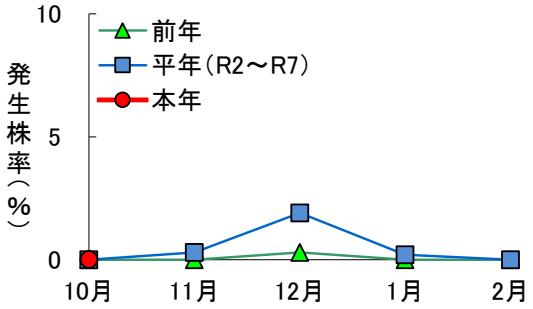


図1　キャベツ黒腐病の発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)　発生初期から防除を徹底する。

３．アブラムシ類

１）予報の内容
　発生量：**平年より多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
　①定期調査（図1参照）
　　発生株率：3.1%（平年1.1%、前年1.3%）
　　平年比：多〈＋〉
(2)11月の気象予報
　気温は高く、降水量は多く、並発生の条件〈±〉

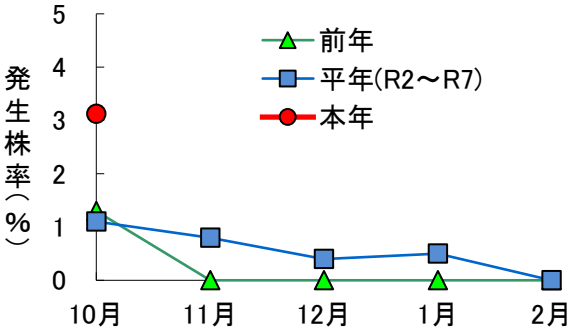


図1　キャベツでのｱﾌﾞﾗﾑｼ類の発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)薬剤防除の際は、下葉や葉裏までかかるように十分量を丁寧に散布する。
(2)抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

キク

【概要に戻る】

定期調査：8 圃場
調査日：10 月 19～22 日

１．白さび病

１）予報の内容
　発生量：**平年よりやや多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
　①定期調査（図 1 参照）
　　発生株率：0%（平年 0%、前年 0%）
　　平年比：並〈±〉
(2)11 月の気象予報
　降水量は多く、多発生の条件〈＋〉

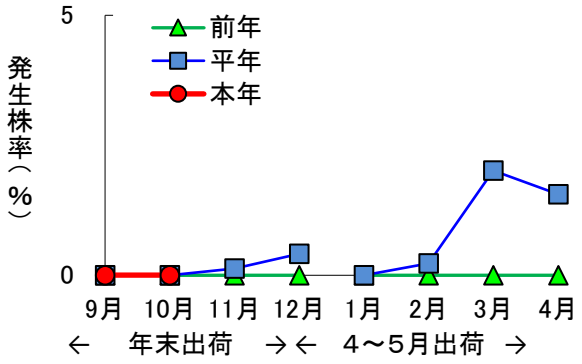


図1　キク白さび病の発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)施設内が多湿にならないように適宜換気を図る。
(2)発病後の薬剤散布はほとんど効果がないため、発生前から薬剤を定期的に散布し、予防を徹底する。散布する際は、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように散布する。

２．アザミウマ類（ｸﾛｹﾞﾊﾅｱｻﾞﾐｳﾏ、ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ、ﾐｶﾝｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ）

１）予報の内容
　発生量：**平年よりやや多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査（図１参照）
　発生株率：13.0%（平年 7.7%、前年 13.8%）
　　平年比：やや多〈＋～＋〉

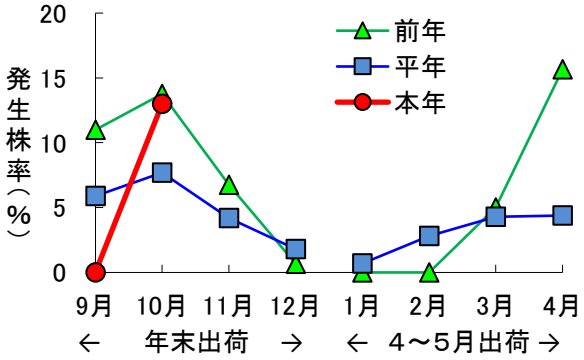


図1　アザミウマ類のキクでの発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。
(2)施設内の侵入を防止するために、開口部に 0.4 ㎜目以下の防虫ネットを被覆する。
(3)発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。本虫は、薬剤のかかりにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。
(4)ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病（TSWV）・茎えそ病（CSNV）のウイルスを媒介する。発生株を認めた場合は速やかに取り除き、媒介虫の防除を徹底する。

３．ハダニ類

１）予報の内容
　発生量：**平年並**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査
　発生株率：4.8%（平年 6.7%、前年 13.8%）
　　平年比：並〈±〉

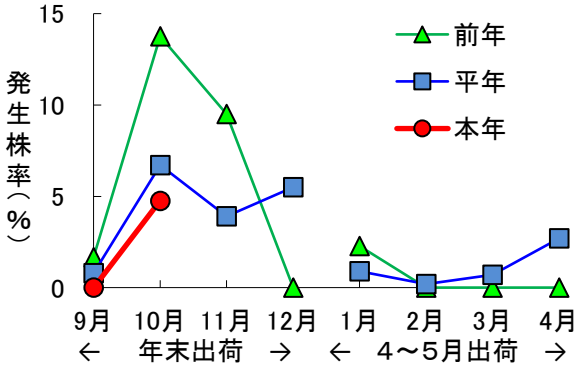


図1　ハダニ類のキクでの発生推移

３）防除上注意すべき事項
(1)圃場をよく観察し、早期発見、早期防除に努める。
(2)葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。
(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

４．チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

１）予報の内容
　発生量：**平年よりやや多い**

２）予報の根拠
(1)発生の現況
①定期調査(図１参照)
　被害株率：0.5%（平年 1.6%、前年 0.3%）
　　平年比：やや少〈－～±〉
②フェロモントラップによる誘殺数
　ハスモンヨトウ　平年比：やや少〈－～±〉（野菜共通、１．チョウ目害虫　図３参照）。
　オオタバコガ　平年比：多〈＋〉（野菜共通、１．チョウ目害虫　図４参照）。
　シロイチモジヨトウ　平年比：多〈＋〉（野菜共通、１．チョウ目害虫　図５参照）。

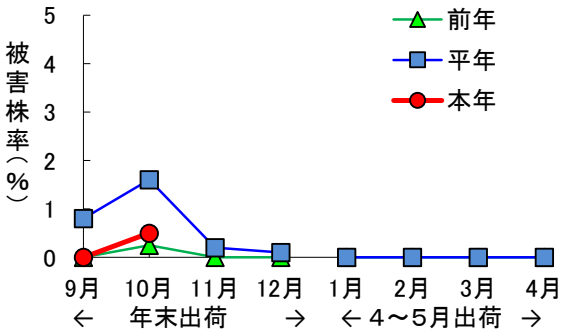


図1　チョウ目害虫によるキクでの被害株率の推移

３）防除上注意すべき事項

(1)発生種・発生程度は圃場ごとに異なるため、必ず圃場での発生状況を確認する。

(2)薬剤防除に当たっては、使用方法(収穫前日数等)を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

(3)幼虫は、齢が進むと薬剤の防除効果が劣るため、若齢幼虫期に防除を行う。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター　病害虫防除部

〒840－2205　佐賀市川副町南里1088

TEL　(0952)45－8153　FAX　(0952)45－5085

Mail　nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html

防除センター　総合防除計画

病害虫総合防除計画掲載アドレス https://www.pref.saga.lg.jp/kiji003101844/index.html